

氏名	姜 明 采			
学位の種類	博士（工学）			
学位記番号	博甲第 241 号			
学位授与の日付	2019 年 3 月 31 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
学位論文の題目	震災記念堂を中心に計画された横網町公園の建造物に関する研究 —「日本趣味」の建築の成立過程について—			
論文審査委員	主査	神奈川大学	教授	内 田 青 蔵
	副査	神奈川大学	教授	石 田 敏 明
	副査	神奈川大学	教授	曾我部 昌 史
	副査	神奈川大学	教授	山 家 京 子
	副査	神奈川大学	教授	中 井 邦 夫
	副査	日本大学	特任教授	大 川 三 雄

【論文内容の要旨】

大正期から昭和初期、とりわけ関東大震災以降、日本の建築界では鉄筋コンクリート造や鉄骨造の新しい工法を用いつつ、瓦屋根に象徴される伝統的意匠を用いた建築が出現した。これらは「日本趣味」の建築と称され、当時の歴史主義建築や欧米に見られる新傾向の建築とともに定着した。

この伝統的意匠を取り入れた建築は、これまで明治期以降の欧米建築の導入への反動としての建築家たちによる伝統解釈の表現である、あるいは、軍国主義化した時代を表現したものといった解釈がなされてきた。しかしながら、こうした伝統回帰とも考えられる建築の出現は、当時の一般の人々の意向を反映することで誕生したとの解釈もまた可能と考えられる。

そこで、本研究では、この「日本趣味」の建築が一般の人々による国民性の表現として生み出されたものであることを、現存する初期の「日本趣味」の建築として知られる震災記念堂（現「東京都慰霊堂」、以下、本研究では「震災記念堂」と称する）を含む横網町公園（現東京都墨田区横網 2 丁目 3 番 25 号）内震災記念建造物を取り挙げ、その設計経緯をもとに「日本趣味」の建築の誕生する過程を通して明らかにすることを目的とした。

分析にあたっては、事業主体、一般の人々、設計者といった三者の視点から資料を収集し、分析を行った。すなわち、主なる資料は、事業主体の資料として東京震災記念事業協会の事業報告書『被服廠跡』、一般の人々の意向を読み解く資料として新聞（『朝日新聞』、『読売新聞』、『東京日日新聞』、『都新聞』）を対象に関東大震災（1923（大正 12）年 9 月 1 日）から公園内建造物が全て竣工した年の 1931（昭和 6）年 12 月 31 日までに 471 件の関連記事を収集）と建築系・芸術系雑誌、そして、設計者側の資料としてこれまでその存在が知られていなかった現横網町公園内事業を担う東京都慰霊協会の所蔵資料である震災記念堂の設計競技関連図面 39 案と、横網町公園内建造物に関連する青焼き図面 46 枚を用いた。

本論文の構成とその内容は以下の通りである。

第1章では、1924（大正13）年12月22日より1925（大正14）年2月28日までに実施された震災記念堂の設計競技に注目し、応募図案の意匠的特徴を明らかにしている。東京市は1923（大正12）年10月、関東大震災の惨禍を後世に伝えるため、被服廠跡に設けた横網町公園に納骨・慰霊・展示の機能を兼ねる震災記念堂を建設する計画を発表し、設計競技で221案の応募があった。このうち外観意匠が把握できた76案の図案応募者の特定と、その意匠的分析を行った。その結果、76案のうち41案の図案応募者が建築業に携わる人物であったこと、また、76案のうち60案が当時流行した洋風意匠を基調とする中で、歴史主義風、表現主義風、和風、東洋風など多様な作品が見られたこと、とりわけ、大正中期以降導入されていた表現主義風の作品が最も多かったことを明らかにし、大正期建築界の動向が反映されていたことを指摘した。

第2章では、納骨・慰霊・展示の機能を持つ震災記念堂の建設経緯に注目し、「日本趣味」の建築として成立した過程を明らかにしている。

その結果、震災記念堂は1930（昭和5）年、寺院建築の和風意匠を基調とした「日本趣味」の建築として竣工するまで八回の設計変更が行われたことを明らかにしている。すなわち、東京市公園課課長・井下清が提示した計画案は社寺建築の和風意匠であったが、設計競技に応募した建築家たちの提案によって洋風意匠の一等案が当選した。しかし、仏教連合会や本所区民に代弁される一般の人々は、洋風意匠を用いた一等案を批判し、新しい和風意匠としての設計変更を求めた。そうした人々の意向を踏まえて、最終的に瓦屋根など伝統的要素をもつ「日本趣味」の建築として竣工した。このことから、「日本趣味」の建築といわれる震災記念堂は、一般の人々が自らの国民性を表す和風意匠を求め、その要望を反映したことにより誕生した事例といえることを明らかとした。

第3章では、展示の機能が施された震災記念堂の付帯施設である復興記念館（現「東京都復興記念館」、以下本研究では「復興記念館」と略称する）の建設経緯に注目し、「日本趣味」の建築として成立した過程を明らかにしている。

その結果、復興記念館は、1931（昭和6）年の竣工まで三回の設計変更が行われたものの、屋根部を含む細部表現を中心に社寺建築の和風意匠を取り入れながら「日本趣味」を具現するという設計方針は一貫していた。このことから、震災記念堂の付帯施設という性格が建築意匠に反映され、「日本趣味」の建築として誕生したことを指摘した。

また、設計変更の過程において、社寺建築の和風意匠を簡略化する傾向が窺えた。この背景として、当時流行していたアール・デコ様式の影響と、モダニズムの影響を受けた合理主義の建築家たちによる「日本趣味」の建築の表現方法が反映されたと考えられることを指摘した。

第4章では、震災記念堂と復興記念館のほかに横網町公園へ計画された建造物に注目し、「日本趣味」の建築としての特徴を明らかにしている。

横網町公園内には、仮納骨堂・記念品保管庫・絵馬堂・門・鐘楼・事務所が計画された。これら全ての建造物は、公園内主屋である震災記念堂との意匠的調和を試み、社寺建築の和風および東洋風意匠を用いていることと、そこに見られる意匠的特徴が当時の「日本趣味」の建築を表現する主流的な手法であったことを指摘している。

結論では、第1章から第4章の内容を要約し、それらの内容をもとに横網町公園内建造物から見た「日本趣味」の建築の成立過程についてまとめている。すなわち、新聞記事などで確認された洋

風意匠の震災記念堂に対する仏教連合会や本所区民に代弁される一般の人々の意匠的要望は、伝統的な和風意匠の震災記念堂を生み出した。この和風意匠の震災記念堂、ならびに横網町公園内建造物は、まさしく「日本趣味」の建築であり、一般の人々の要望を反映したものとして、この「日本趣味」の建築が生み出されたことを示すものといえる。また、敷衍すれば、「日本趣味」の建築は、国民が求めた建築として誕生したという新しい解釈が提示できると考えられる。

【論文審査の結果の要旨】

本研究は、大正期から昭和初期、とりわけ関東大震災以降に出現し流行した、瓦屋根に象徴される伝統的意匠を用いた「日本趣味」の建築と称される建築に関する成立過程を論じたものである。

この伝統的意匠を取り入れた建築は、これまで明治期以降の伝統を捨てて欧米建築の導入を続けてきた建築界への反動としての建築家たちによる建築表現である、あるいは、軍国主義化した時代の中での日本を表現したものといった、思想性や時代性に焦点を当てた研究の中で様々な解釈がなされてきた。しかしながら、本研究では、こうした伝統回帰とも考えられる建築の出現は、当時の一般の人々の意向を反映することで誕生したという、これまでにない解釈を提示し、それを具体的な建築の設計から竣工に至る過程を通して具体的かつ実証的に論じたものである。

その成果は、近代日本建築史研究における新たなる貴重な知見でもある。とりわけ、大正期から昭和初期は、わが国建築界が欧米のモダニズム建築を導入し始めた時期であり、様式論的に大きな変化の見られた時期でもある。そうしたモダニズム導入期のわが国の建築界の新しい動きの一端が明らかにされた。なお、様々な視点からの研究資料を扱う中で、これまで公開されてこなかった貴重な資料を用いるなど、高い資料性が認められる。今後、この研究成果をもとに、この戦前期の建築や建築動向の解釈は、新たなる展開を促されるものとも考えられる。その意味でも、本研究は、今後の発展が大いに期待されるものである。このことから、本論文は、学位論文としての価値を十分有するものと判断できる。